

国立劇場再整備に関する有識者検討会（第3回） 議事要旨

1. 日 時 令和6年4月25日（木） 10：30～12：25

2. 場 所 独立行政法人日本芸術文化振興会 第1会議室

3. 出席者

（委 員）尾上委員、板東委員、平子委員、宮田委員

（振興会）長谷川理事長、杉浦理事長代理、大木理事、切替理事

4. 議事要旨

（1）前回検討会の議事要旨確認

第2回検討会の議事要旨を承認。

（2）意見の概要（中間とりまとめに関して議論が行われた。）

- ・日本の芸能やことばを守るということは国立劇場が今まで果たしてきたことで、今後も果たしていくべき大切なこと。この重要性にもっと気づかなければいけないし、気づかせる努力が必要。政府にも真剣に議論していただきたい。
- ・コロナの時に経験したように、文化芸術の魅力や必要性を説得していくのは本当に難しく、感情や情緒というものは数値化しづらい。しかし芸能の魅力や伝承しているものがなぜこんなに素敵なのかということを広く伝えていかななくてはいけない。その方法は常に劇場や芸術団体は、使命として持っていないといけない。内に閉じて制作と発表だけやっていくことなく、魅力や意義を伝える工夫について知恵を絞っていくことが重要である。
- ・伝統芸能を「日本の宝」だと言っていること自体がもうある意味で形骸化しているのかもしれない。もし日本の宝として認識されているなら今のような状況にはない。伝統芸能を失うということは、自尊心、アイデンティティ、自立性、主体性、そういったものを日本が失っていくということであり、現在そういう危機にある。
- ・伝統文化について、国際的な面だけでなく、日本の文化の淵源であるという面を大事にするということも重要視すべきである。
- ・収支にこだわると、本当の文化というものが損なわれるかもしれない。文化芸術は全く収支を考えなくていいとは思わないが、収支を重んじてしまうと、文化芸術や芸能の役割は損なわれると思う。
- ・民間活力や観光といったことは必要なことだが、それが国立劇場の建設にあまりに重要視されていくと違ったものになっていくのではないかという危惧を感じる。
- ・伝統芸能というものを収支だけで見てはいけないということは当然だと思うが、赤字が続くなかで運営はできない。伝統芸能の魅力度をどう高めていくのかということを当然やっていかなければならず、そこから最大限の収入を得るということをこれからのプランの中に組み込んでいかないと持続的という観点からすると非常に危ういものになる。

- ・新しい発想を得るという意味では、外からの目である民間というのは重要。いろんな視点で国立劇場をさらに国民にとって文化の殿堂として価値あるものにしていくために、もう少しいろんな人たちの知恵を借りていくということはあるといい。
- ・隼町は集客性に乏しいかもしれないが、「隼町は素敵な場所ですよ」と言える方向に持っていけるといいのではないかと感じる。いろんな制約があるが、格式のある場所であり、日本の顔として誇らしい場所だということアピールできると思う。
- ・皇居のすぐ前にあって、しかし、その魅力を来た人たちが楽しむような感じの施設にはなっていない。劇場自体を楽しむというのは別にして、魅力開発の余地はある。
- ・せっかくのこの立地をうまく使えていないのではないかと強く感じる。今の国立劇場は封鎖し中の宝を保存するというイメージだが、そうではなくてまさにこの景観を利用したもっと透明感のある劇場ができないか。中の仕事も芸ももっと見えて、創造意欲を掻き立てる建築物であってほしい。
- ・場所の魅力を引き出していかとか、インバウンドに対して発信の機能を高めていかとか、いろんな人が集まりやすいようにということを考えていくうえで、今は不十分なところに関してもそのような魅力を引き出すような施策を考えていかなくてはならない。また品格の問題やいろいろな機能というものを重視していくことを強調していく必要がある。

以上